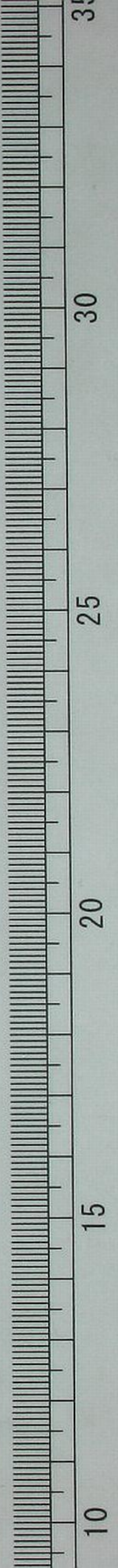




= 5
2364
1



門 二五
號 2364
卷 1

遠星先生述

天文俗禮

早稻田大學圖書館
第30.2.23號
藏書

尺里所究
不訕翫所

浪華書舖河内屋
積小館精造訂本

天文俗禮

談卷之一

目錄



寒暑之事
人之眼力之事
撰列有る各地獄之事
東西天頂遠近之事

天文俗談卷之一

寒暑之事

或問曰春復秋冬寒暑乃誰來らんきんすらんきん夕らんきん日らんきん輪らんきん運行らんきん

者らんきん遠らんきん小らんきん多らんきん何らんきんなるらんきん答曰然らんきんり又問然らんきんるらんきん友らんきん至らんきん否らんきん

月らんきん中らんきんの時らんきん日らんきん轉らんきん小らんきんりらんきん切らんきん極らんきんりらんきんてらんきんきらんきんをらんきん究らんきんてらんきん天らんきん頂らんきんにらんきん近らんきん

小らんきんき極らんきん熱らんきん志らんきんしらんきんるらんきん極らんきん北らんきんのらんきん方らんきんにらんきん冬らんきん至らんきん十一月らんきん中らんきんにらんきん日らんきん

輪らんきん南らんきん至らんきん乃らんきん極らんきんありらんきんきらんきんをらんきん究らんきんてらんきん天らんきん頂らんきんよらんきんをらんきん一らんきん六らんきんをらんきん極らんきんなりらんきん志らんきん

しからざればこころかり然るよ今を暑は清は各其
南北の極る夏を冬をじり寒はも暑はもさほ
ゆるはゆる地乃時をさして小暑大暑立秋のし極
熱はかきく小寒大寒立春のし極寒も地はく氷
雪も多しこ流日輪各其の極は距く北よ南へか
けくきくは南よ北へかけく地乃のし極は日輪
運乃のき道よよるいこ其理お粗詰するやかりふ
審詳よふもさかたるよ蓋日地乃ふ審りるはむ極く

然とも天地乃る陽氣をその大よ小を太陽小陽
せりるもの事なり宇宙は中火氣を純粹の
その凝て日と地と天と在る日と地と在る火
かり天乃暑氣を勿論電光流星客星妖星光物
乃類地中の火氣陽氣人身は温煖心火お火衛氣の
陽氣よゆると太陽に属せるといふことが禽獸
乃身體心氣の温煖とゆるお同どもかり如其の理
かりるのゆへ寒暑を清はハとゆるの事天地

乃同の水気たるものも万物にしく生太陰小属
すりも同理なる故に南赤道よりなる土地の列を
極熱焚がぶとく北極や天頂小近なる列も寒凍云
ぼりか、北極に應じく南北乃列々みな寒暑の
候しる形日本のはり小ても体極南初のりり、
寒凍あしく暑も多し、秋後秋中能登がたおきに
次四國九列のりり暑気あしく暑かさが如しこれ
皆日輪運動の事をいへり然とも太虚乃ち小

てハ風乃皆如くすりり太陽と火気はしくこるる
のり地のはりり暑気あしく日輪は火気お中にと
りり暑気あすり地中の陽気おきに應じて又
さりり暑気あしく地中冬をい一陽来漢し是れは
ては陽気増長して地中れまかり地中の陰気
陽気よこし、河事しきく小寒大寒のり陰気地
に陰なり天上乃寒気と地のはり人身身也、
さり暑気あしく人身に培りく氷暑もたかり冬をい

行極さしむもいまだ人身に暑氣の滲らるる暑氣の地
球に世海にさるるはつら暑氣のつらさるなり立秋
処暑乃ち後秋暑の地さく立去雨水のし海能きの
地さるるも皆人身の地さるる来りて寒暑のさ
かりのさるるやも暑さるるも身はさるる地さるる
お小返屋してふまなり此れも地さるる老人の地の
性さるるなり乃理も同じ申なりと知る處一よて同
集り井乃水甚凜冷として冬温暖可も此のさるる

乃事り曰然り右の地を冬を陽氣主と申りて地中に
潜伏す故に井華水温小湯氣の立去りなり夏ハ陰
氣地中の主と申りて陽氣地中にさるる故に井水
凜冽として冷なり東武乃井のさるる地下に溝と申
せり諸方へ水すといふ事大川のさるる汲りごとく
別なり井水夏をいへ冬をいへ御りなり大川
乃長流水と汲りなり

人之眼力之事

或曰人間乃眼力といふる子細し横と堅と小大分
 乃不同のちなるにちおとらるる形も入る十間より
 の間口れ家がまへてても格別也もれとてあし
 とへ十間より高きもの浦糸たうさやに四つ
 あり家の人小きくおとらるる敷山もあまて百間
 にすこきと愛宕山あまて百四十間しきとて登
 山するにゆるりゆるりして山をゆるりゆるりして十
 間の行程あまて山の素中れあまて右のぶし

大まか見漸とて川を九乃とて測量する敷ありとて
 耳或る間もゆるり高き如きありありと横小地と乃
 幅狭んてとて西ありとて北ありとて南ありとて北
 ありとて南ありとて西ありとて北ありとて南ありとて
 意味なる也一禽也天氣とてけとてやとて眼空と
 する獸を地氣とてけとて匍匐して地はゆるり眼地と
 みる人も天地間の氣とてけとて頭はとて足とて
 こし眼横とてゆるり横とてゆるり横とてゆるり横とて

幅とんがちきなり交とて地と幅とらふ
 月影の高さとんき長をみゆる人目の性ふらふ
 交とらるる一叔人の眼力きさとのハ小小とん近きも
 乃ち大小とんえちる小きくかきハ次才に小に終よんえ
 せやにの目をみる人眼の暗さく瞳子の珠のぶと
 とのなきをききとあててらんらん心のえすうとらふ
 る由ハ太陽を太極ふして地球の小極の暗虚の影次才
 小をあり月天してハ月体影小入て蝮とくくも衆

の天小とら高きつらふ影消てかきり早の蝮すらふ
 かさうかく理小てかきり海きり理あきとも面りハ
 解一がき一算術ハあき人ハ皆得さの事ありさハハ
 かきりし事かき眼のゆは乃消をたれらる人ハ獸の如き
 胎ハ具して生るものハ眼鼻口耳前陰後陰の九竅
 あり九竅のつらものハ胞とあり下にたけ小禽乃忍非
 小よ川と陸と生るものハ眼鼻口耳陰の八竅
 何れも前陰後陰よりらめ一穴よて交合を果

とも兼用す地分を胞^{まぶこ}たりたりとへきく卵^{たまご}小^こよへ
て湿^{しつ}よ生^{せい}ずりその魚^{うい}蛇^{へい}を類^{るい}を胞^{まぶこ}か一^つ常^{じょう}に終^{しゆう}ふ
らず化^{くわ}生^{せい}ずりその眼^め小^{せう}穴^{あな}か一^つ黒^{くろ}点^{てん}ありその蚕^{のこ}風^{ふう}
子^ご々^々乃^の類^{るい}々^々きぬり湿^{しつ}熱^{ねつ}水^{すい}気^きとるの^の湿^{しつ}生^{せい}ずりその
蚯^{こう}蛤^{かく}蚌^{べい}乃^のいも眼^めか一^つ貝^{かい}系^{けい}も此^{こゝ}と大^{だい}和^わ本^{ほん}州^{しゅう}小^{せう}裁^{さい}
らまきそり

攝列有馬各地獄之事

修^{しゆ}幸^{こう} 愚^ぐ 攝^{にっ}列^{りやう} 有^{いう}る 乃^の 温^{おん}泉^{せん} 湯^{とう} 治^ちせしにまてん

去^こかりし湯^{やう}入^いの人^{ひと} 或^{ある}ハ疾^{やく}と助^{たす}てま^まくに極^{ごく}ぶ日^ひ和^わ
也^{なり}深^{ふか}なりりまきぬれこの坊^{ぼく}かこの宿^{しゆく}屋^やなりりま
まて鼓^{つづみ}が沸^{たぎ}りぬれか一^つ時^{とき}々^々未^まの^の極^{ごく}かり一^つ愚^ぐ
もこもふしりそ徒^{つぎ}然^{ぜん}と消^{しょう}すれ乃^の遠^{とほ}小^{せう}多^たの地^ぢ獄^{ごく}
こ補^{おぎな}すの要^{よう}ありれとまきり世人^{よじん}のまき知^しるまきぬ
大^{だい}坂^{ばん}志^し人^{にん}一^{いつ}人^{にん}地^ぢ分^{ぶん}歩^ふ速^{すみ}者^{しや}の^の人^{にん}かり億^{いっ}々^々ま
アてかの多^たの地^ぢ獄^{ごく}まきりりりそのまき人^{にん}山^{さん}城^{じやう}
ご一^{いつ}川^{かわ}撮^{とつ}てその中^{ちゆう}へれれれその地^ぢ周^{しゅう}回^{かい}小^{せう}石^{せき}を

石壁しし水かさ井のむて浅くおぼしき
底に蟻先づつらきて甚くしこ体めりおぼしき
人益ありとせする人い云けい彼穴のふに伏さ右
此蟻を助者つらぐが率倒して人事とあらずいを伴
大小とも此地乃人ともことごとく世後いしい気はよ水は
いとも葉持合し人も希いふて水のきし跡の外
乃雄義いつりしつらくとしていかいきいくいふいし
かしも面いとい書菜のぶとくあ人の肩いにかりあし人

もきすもあ合いてよろしく旅常よりしいはい良皮のつら
目いんいらいくいおいやとふ審にたいひいの翌日始
飯いすい己いの時いに飯穴いふいらいくい其い氣いをい覗いひいみ
まいとも河の氣もいすいくい毒氣いれいらいるい入いさいといのか
あいよ又いま日乃末の時いけるいの刻いふいめいらいていういひいみ
系毒氣起て穴いとい不い進いはいくい危いくい以い僅いにい世いのい例いよいま
ういりい覗いふいさいへい其い氣い小い壇いがいくいまいをいめいてい思いひいされいばいあ
中の毒氣れ起るいあいめいりい世いのい起いるい時いにいれいらいるいにい此

こけり 潮汐乃さし 砂きあがり かしとみんさう 古人の
庭をさうきききの地獄 名付て人のよきさうさうにせ
しとんさうり 毒氣乃事ば云つてさうら湯浴の客
乃おのち地を恐る嫌ん事を憂てふまをゆはせざる
とのゆきま下野列那須野の殺生石かこりふまも其
数百の庵し其地毒氣の起るさうらをさうつて大石
とさうしとさうらと殺生年毒氣石よはて毒の害を
さすかへし 振列 古曾部こりふまに 徳園は師の本

けり 街道より十二町さうらおの十二町こり
のかさうらに敷けりその敷乃らに垣とゆひ
ふ石ありふまも其透れち良ひゆりハ毒石なり
こたれもさう殺生石とさうそのま乃地中の毒氣
乃起るまゆりし思ひさうり惣トておの毒氣の起
はち中ふち 砒霜名礬石等れ毒石なるとのゆりけふ
るまゆのと砒黄と名付火小て鍊その成砒霜といふ砒
霜ハ毒氣猛烈ふまゆりそのハ毒氣力少しこいへとも

礮石礮石の礮石大毒ありとの事いふは礮石
外小も地中いづかの毒氣ありとの事いふは礮石
土西域等地中より毒氣は起り深山等深く有る由
書いといふなり物産の學に長ずる竹某曰礮石有る
る地獄も亦其地中礮石ありと宜なる事

東西天頂遠近之事

或學文者乃いづく列子に孔子東に遊し江雨の小兒
乃辨圖といふ其故と同バ一見のいづく亦と日乃始

出づる人多くと云ふと述一日中にを遊すとすその日
也一六日輪大小うえ日中少く小をみゆり遊るとのハ小に
そのハ大形の一見のいづく亦と日乃始と出るとはを
て日中少く遊るとすその日ハ日の出少くあつとす
日中小ハ熱しをそのハ熱きをそのハ涼なり孔子決す
ふ日あつと涼也兎笑て曰それ孔子と多智なりと
もるやといふや日あり小乃遊といふや曰亦まづの事
ハ三才發微天經或同等の書小知愚が或同註解小也

説と和解してくらくく述をたまたむに板形小なりと
はるのまじりば抄の大略とかくらん天の體渾圓地の體
も亦渾圓なり東西天頂を近乃差別がき理が日
月乃體大小をくらふかきくすは海川の事游氣乃くこ
地心と地皮とのあふりく東西の天と日中の天と不同
乃事ありなり円体のとのれ東西天頂を近なりとさか
ら地心なりとまじり差別が一人地球の皮小處なりと
地球の半体千五百里許天頂を近なりとまじり地球の全徑

凡三千里許なりとのあふり然れども日中より大なりとて
つらつら日中より小なりとてつらつらハを近のくさなりと
あふり地中の湿気時としてく騰るまを游氣とく小
蒙氣ともい質粒微なりと天象と隠蔽ふくつらとす
といへども其氣地との空体とけり小なりとて大なりとて
鼻をくしてるをみせしむ眼鏡とくしきく扱せらるる
游氣の厚ハ眼鏡の愈厚小似たり日中より太陽の厚ハ
消くもして浮游氣を冬を掃て映る隔るものぬく眼鏡とく

したるやうにその地を乃木体とらる月星ともはりの地
なり故に出入の大小天頂のなり物々を冷す日中ハ
熱すも何れもすんで物々を浮遊水湿の気不隔はれて
すく日中ハ水湿の気なきふりて熱し遊気の升る
ハ日輪地下のなり陽気下より蒸起せしめて地中ハ
水湿気小のきて遊升て遊気とらる太陽不照燥さる
きハ遊気消す故に日中には遊気か其土地水子近
湿地ハ遊気乃升る事も高原湿気も物く水邊もか

く燥たる地ハ遊気の升る事も昇薄なり又向月星ハ夜
陰の事少くハ天頂不て何れ少くもや遊気の消さる
き理ぬ夜陰益遊気盛るへきなり答曰夜ハ遊気ハ
消る消ぬのたふすあふ又別小くけりり昼としてハ
理ハ向月星も日中ハ遊気消すりとのなきハ洗をい
ハたふすしていり清夜不ても夜陰遊気かといふ
ふとかりその遊気と通すく天頂不るハ遊気う丁
く東西と斜小なる地遊気厚く斜小なるハ似右の地

皮ひ居かてらるゝの事つり三方發微の主意とるこ圖解い
 して右云註解のてと載まるまり右の事をつるる東西ハ大いに
 見え天頂てんてい小こより中ちゆうり湖こ水すい大海たいかい波なみ濤たうとありて
 其の出入しゆいをしるる日月にちげつ星せいともに別べつして大小たうせうをしるる
 を追おひひてしるるハ何なにれれず時とき々々遊ゆう氣きの眼鏡めがねのみかこしし
 りりと知しるる

天文俗談卷之一終

